

近代日本語における副詞「全然」の様相について

趙 宏

一 はじめに

本論文は近代日本語における副詞「全然」の様相を研究の対象とするものである。「全然」は程度副詞（例えば、「全然素晴らしい」と陳述副詞（例えば、「全然分らない」）の両側面を持ち合わせる言葉として今まで多くの学者の注目を集めている。先行研究として松井栄一（1977）^① 王信（2000）^② をあげることができる。

松井栄一は「全然」について次のように述べた。

昭和 20 年代に

アブレゲールは全然エライよ（安吾巷談，田園ハレム）

スゴイじゃないの。全然，肉体派ね（自由学校，ふるさとの唄）

などのような言い方が流行したとき，従来の用法は必ず否定を伴うのに，こういうくずれた表現をして嘆かわしいという声がよく聞かれたものである。しかし，龍之介が「とても」について述べたのと同様，必ず否定を伴うというのは事実と違っている。「全然」が肯定表現を伴う用法は従来いくらでもあったのである。

全然失敗して帰って来た（河霧）

一体生徒が全然悪るいです（坊っちゃん・六）

全然秘密にしてゐた（橿）

ぜんぜん貧乏くさい話じゃないか（「おじさんのランプ」所収，貧乏な少年の話・二）

これらはそういう用法のほんの一例であるが，問題はこれらが形の上では昭和 20 年代に新しく現れた言い方とよく似ていながら意味はちがうということなのである。新しい方は程度強調の意識で用いているが，以前のは，何から何

まで残る所なくすっかり、まるっきりそういう状態であるさまの意である。
(後略)

王信は「全然」について次のように解釈した。(翻訳は趙)

日本鎌倉時代、室町時代、江戸時代の文献には「全然」は見つからない。明治初期の文献には「全然」の言葉が見つかったが、その読み方は「ぜんぜん」ではなく、「きっぱり」「すっかり」「まるで」である。明治中期から「ぜんぜん」という読み方が現れ始めた。否定とも肯定とも呼応して用いられていたが、大体状態動詞を修飾する。現在の「全然」は主に形容詞・形容動詞を修飾する。話し言葉として若者に愛用される。

本論文は松井栄一と王信の示唆に富む研究から学ぶところが多かった。かれらの研究成果によって、小説における「全然」の様相が明らかにされた。しかし、小説以外の資料における「全然」の様相はいまだ不明であることも事実である。例えば、速記資料⁹⁾における「全然」の様相はどうであったのか、現状では、その調査報告がほとんど見当たらない。速記資料は明治時代にはじまり、当時の話し言葉をできるだけ忠実に写し取ったものである。速記資料を通して、「全然」の様相を明らかにすることができると思う。

今回、本論文は速記資料を中心に「全然」の用例を抽出し、細かに観察し、又、実証を行い、明治から昭和にかけての全貌を掴もうとする。

近代日本語における副詞「全然」は実際にどのようなようであったのか、先行研究から得た結果と重なる部分があるのか、どんな意味用法をもつのか、文末との共起関係はどうであったのか、今回の調査でこれらの問題を判明しようと思う。

二 研究時期範囲

本論文は考察の時期範囲を近代に限る。

ここで指す日本語(発展)史における近代の範囲認定には若干の異説¹⁰⁾がある。通説として近代は明治元年から昭和20年の太平洋戦争終了までの期間を指す。本論文で「近代」というのは通説に従うもので、つまり、士農工商の身分制度が崩壊し、四民平等に象徴される時代である、「現代」すなわち太平洋戦争後の男女平等に象徴される時代と区別する。

明治元年から明治20年までの間は、加藤弘之の『交易問答』(明治2年刊)、

西周『百人一新論』（明治7年刊）などにはみられるように「デゴザル」調を使ったが、文語体のものが多い。明治17年三遊亭円朝は速記「牡丹燈籠」を出版した、言文一致活動に大きな影響を与えた。実際にさまざまな文体や位相の言語資料（口語文）が明治20年代になって、豊富に出揃って、数多くの用例を採集することがはじめて可能になる。よって、今回の研究の範囲は明治20年から昭和20年までの期間とする。

三 調査資料

今回、「全然」の実態を明らかにするために、先行研究で取り上げていない速記資料（落語資料・史談会資料・演説資料）を使った。資料はなるべく種々の傾向のものをまぜるように心がけた。「近代」の意味からまっぴら口語体資料を使用する。

・落語資料⁵⁾

今回取り上げた落語は、すべて『口演速記 明治大正落語集成』（全七巻・講談社・1980刊）に収録されているもので、これらは当時雑誌「百花園」「文芸倶楽部」などに掲載された作品である。『口演速記 明治大正落語集成』はそれらの作品を再録したものである。その第一巻、第二巻、第三巻、第四巻、第五巻、第六巻、第七巻の全421作品（明治22年—大正13年）を調査資料とする。

落語は明治期のさまざまな階層、職業にわたる人々の日常口頭語を反映していると考えられる。

『口演速記 明治大正落語集成』の編者暉峻康隆はその第一巻の巻末で「落語速記発掘の意義」について次のように述べた。

江戸言葉をふまえながらも、欧米文化の急激な影響のもとに変貌した、標準語の基本となった東京言葉の資料としては、その時々の各階層の言葉をきわめてリアルに用いている落語の速記にしくものはない。三遊亭円朝の速記が二葉亭四迷や山田美妙らの新文体、言文一致のモデル・ケースとなったが、この当代口語の使用はもちろん円朝に限ったことでなく、他の咄家もすべてそうであったから、この落語速記集成は、明治・大正の東京語資料として、不可欠のものとなるであろう。（後略）

・史談会資料

今回は『史談会速記録』の全体の速記資料（第一輯明治25年から第411輯昭和13年まで）を取り上げる。明治22年4月、民間の有志者の中で維新の資料の蒐集のために、史談会が設立され、活動が開始した。ここから編集発行されたのが『史談会速記録』である。これは幕末維新動乱期を実際に体験した古老たちの実歴談を速記によって筆録し、活字化した資料である。（『史談会速記録』の解説をもとにした）

『史談会速記録』は談話者の生の言葉に近く、年月日が明らかであって、改まった公の場面の人々の言葉を反映し、利用価値が高いと考えられる。

・演説資料

西洋における演説と演説法は明治の初めに日本に伝わった。当時の演説には学術講演、政談演説、説教、講談などが含まれる。田鎖綱紀が明治15年速記術の演習会を開く、その成果が直ちに現れて、演説が話ことばのとおり文字化されるようになったということであった。

演説の速記として今回は『近代演説討論集』（ゆまに書房・1987～1988年刊）を用いた。『近代演説討論集』は明治10年代から明治20年代までの演説を収録しているが、その中で特に明治20年代の演説を取り上げた。なお、今回は演説全体が文語体のものを除外した。資料は次の通りである。

第十五巻 国民演説第一集、第二集、第三集（明治22、23年）

第十六巻 明治大家雄弁演説、日本大家演説（明治23年）

第十八巻 時事問題名士演説第一集（明治26年）

第十九巻 時事問題名士演説第二集、第四集（明治26年）

四 落語資料における「全然」

「全然」の様相を明らかにするために、『口演速記 明治大正落語集成』の全七巻の作品を調査した。その結果、第一巻、第三巻、第四巻には「全然」という言葉は見つからない。第二巻、第五巻、第六巻、第七巻には「全然」という字面の例が合計29例出たが、その読み方は「ぜんぜん」ではなく、「すっかり」

「まるで」「まるっきり」「まるきり」などである。そのうち「すっかり」は3例、「まるで」は多用され、19例、「まるっきり」は6例、「まるきり」は1例である。

結局、全七巻には副詞「ぜんぜん」の例は見当たらない。すなわち、明治、大正時代には「ぜんぜん」は人々の日常用語としてあまり使われないうし、発達していないと言えるだろう。その用例は次に示した通りである。

第二巻

- 1 ヒョッと立つ時に乃公が挟んで置いて、全然^{すっかり}忘れて仕舞った、「基盤割」

第五巻

- 2 春になったら全然^{まるで}出来なキャ半分でもどうかするから堪忍してお呉んなさい、「掛取」

第六巻

- 3 何んだいは、此様な判官の演方があるもんか、全然^{まるで}無茶だ、「淀五郎」
 4 全然^{まるで}方なしだ、「淀五郎」
 5 確かに然うだ、元気が平生と全然^{まるで}違って居るもの、「淀五郎」
 6 徳さん、お前さんも全然^{すっかり}様子が変わったことね、「舟徳」
 7 何かどうしたって、全然^{まるっきり}負けたからって、十五両だ、「江戸子」
 8 其れが全然^{まるっきり}持って来ないいで、「三百餅」
 9 全然^{まるっきり}持って来ない、「三百餅」
 10 忘れたにも何にも全然^{まるきり}知りません、「孝女お里」

第七巻

- 11 ア、\ 全然^{まるで}変つて終った、「猫の茶碗」
 12 けれどもさういふ訳だから、全然^{まるで}行かねえ訳にも往かねえ、「子別れ」
 13 翌日一日全然^{まるで}寝て了った、「子別れ」
 14 大先生は甘い物へは、全然^{まるで}目も触れんやうな御酒家で在っしゃいます、「代脈」
 15 アノ御金を全然^{まるで}引攫って、三日も四日も家を明けて何うしたんだえ、「お直し」
 16 お前全然^{まるで}口が利けないぢゃアないか、「按摩の炬燵」
 17 酒はどうも性分で全然^{まるっきり}駄目なんだ、「按摩の炬燵」
 18 是で明日の朝になって聞いたって全然^{まるで}知らないんだからね、「按摩の炬燵」

- 19 其では貴郎は^{まるっきり}全然日本酒をお飲んなさいませんで、「ちりとてちん」
- 20 イヤ^{まるっきり}全然飲らないといふ訳でもありませんが、「ちりとてちん」
- 21 此頃は生憎と^{まるで}全然無えんだ、「駱駝の友達」
- 22 俺は^{まるで}全然此長屋の者の顔を知らねえんだから、「駱駝の友達」
- 23 中は^{まるで}全然火の気なし、マッチ一本置かない事にしたら、「碁どろ」
- 24 イヤ^{まるで}全然のまないといふことは到底出来ない話だが、「碁どろ」
- 25 斯ういけば斯うと、何うも^{すっかり}全然遣り損なった、「碁どろ」
- 26 もう例の通り、^{まるで}全然夢中になって在らっしゃるんだよ、「碁どろ」
- 27 ヘエ、緩くりにも何にも昨晩^{まるで}全然マンジリとも致しません、「按摩の蚊帳」
- 28 ポカポカ頭を叩き通しで昨夜は^{まるで}全然眠ずに終わりました、「按摩の蚊帳」
- 29 今朝から^{まるで}全然食べませんで、「唐茄子屋」

五 史談会資料における「全然」

『史談会速記録』には26ヵ輯の全42例の「全然」が出てきた。表1は「全然」の全用例を次の三種に分類し整理したものである。

A・肯定と呼応する型

- 例 1 全然其の希望を捨て仕舞った、(第百八十三輯)
- 2 機が全然熟して参りましたが、(第三百十三輯)

B・否定と呼応する型

- 3 世間では全然この区別を立てず、(第二百六十一輯)
- 4 全然見込はない、(第三百七十一輯)

C・中間型(形態的に肯定表現、意味的に否定表現。否定意味を持つ肯定文末と呼応する型)

- 5 石高の上から旗本御家人の区別を立る事は全然不能である。(第二百六十一輯)
- 6 全然事實が違って居ります、(第二百九十輯)

表 1

	時 期	A(肯定型)	B(否定型)	C(中間型)	合 計
第 八 十 三 輯	明治 32 年	1			1
第 百 六 輯	明治 34 年			1	1
第 百 八 十 三 輯	明治 41 年	1			1
第 百 八 十 六 輯	明治 41 年		1		1
第 二 百 八 輯	明治 43 年	2			2
第 二 百 二 十 三 輯	明治 44 年			1	1
第 二 百 二 十 四 輯	明治 44 年	1			1
第 二 百 二 十 八 輯	明治 45 年		1		1
第 二 百 五 十 三 輯	大正 3 年	1			1
第 二 百 五 十 八 輯	大正 3 年	1			1
第 二 百 六 十 一 輯	大正 4 年	3	1	1	5
第 二 百 六 十 八 輯	大正 4 年		1		1
第 二 百 八 十 九 輯	大正 6 年	1		2	3
第 二 百 九 十 輯	大正 6 年			4	4
第 三 百 十 三 輯	大正 10 年	1			1
第 三 百 二 十 一 輯	大正 10 年	3			3
第 三 百 二 十 四 輯	大正 11 年		2		2
第 三 百 五 十 八 輯	大正 15 年		2		2
第 三 百 六 十 一 輯	大正 15 年	1			1
第 三 百 六 十 七 輯	昭和 2 年	1			1
第 三 百 七 十 一 輯	昭和 3 年		2		2
第 三 百 七 十 五 輯	昭和 3 年			1	1
第 三 百 八 十 三 輯	昭和 5 年	1			1
第 三 百 八 十 四 輯	昭和 5 年	1	1		2
第 三 百 九 十 一 輯	昭和 6 年		1		1
第 三 百 九 十 四 輯	昭和 7 年	1			1
合 計		20	12	10	42
百 分 率		47,6%	28,6%	23,8%	100%

(空欄は用例 0 を表す。)

表1から、「全然」は肯定とも否定とも結びつく例が見られる。中間型の例も少なくない。

肯定を伴う例が全用例の47・6%を占める。その例は次のように示す。

- 1 兵士と云ふものハ全然出拂ふてしまふた、(第八十三輯)(動詞と共起する)
- 2 全然其の希望を捨て仕舞った、(第百八十三輯)(動詞と共起する)
- 3 即チ本建議案二全然賛成スル者デアリマス、(第二百八輯)(動詞と共起する)
- 4 全然此提案二賛成致シマス、(第二百八輯)(動詞と共起する)
- 5 全然賛成をせられた人でありますから、(第二百二十四輯)(動詞と共起する)
- 6 全然区別せられたのであります、(第二百五十三輯)(動詞と共起する)
- 7 其齋彬公が琉球にして居らるゝ密命に依ると全然反対であります、(第二百五十八輯)(名詞と共起する)
- 8 これは全然間違であると言はねばならぬ、(第二百六十一輯)(名詞と共起する)
- 9 果して然りとせば御附家老が老若の中間に位したなどいふのは全然誤謬である、(第二百六十一輯)(名詞と共起する)
- 10 然るに加賀以下は全然臣下の待遇であるから、(第二百六十一輯)(名詞と共起する)
- 11 全然政界を退いてお出になります、(第二百八十九輯)(動詞と共起する)
- 12 機が全然熟して参りましたが、(第三百十三輯)(動詞と共起する)
- 13 先帝陛下は全然獨逸式に改革するよりも佛式形を保存せよとの勅命に依り、再調査の結果前述の譯であるそふです、(第三百二十一輯)(名詞と共起する)
- 14 此両戦役の實施は全然獨逸式の結果に外ならんと思ふのであります、(第三百二十一輯)(名詞と共起する)
- 15 日本の軍制と申さば全然先輩者として大村益次郎此方が、日本での唯一の計画者の偉い人で、(第三百二十一輯)(名詞と共起する)
- 16 無論全然大山參謀等の宣傳でありまして秋田藩の志士連中はうまゝ其の策謀に載せられたのであります、(第三百六十一輯)(名詞と共起する)

- 17 全然退守主義を取られ、(第三百六十七輯)(動詞と共起する)
- 18 しかし吾々の少しばかりしらべました所ではそれは全然誤解であらうと思ふのであります、(第三百八十三輯)(名詞と共起する)
- 19 この御日記によりますと実際の御様子は全然反対でありました、(第三百八十四輯)(名詞と共起する)
- 20 屋島及壇ノ浦における教経の勇壮極まる事蹟といふものは全然抹殺されるのですが、(第三百九十四輯)(動詞と共起する)

否定を伴う例は全用例の 28.6%を占める。その用例は次に示した通りである。

- 1 然るにこの詔旨が全然行はれぬかと言へばさうで無い、(第百八十六輯)
- 2 全然頭のない位の放漫なる所為をして居る、(第二百二十八輯)
- 3 世間では全然この区別を立てず、(第二百六十一輯)
- 4 これは全然無言ではない、(第二百六十八輯)
- 5 全然関係が無かったやうにも思はるゝのであります、(第三百二十四輯)
- 6 全然関係が無い、(第三百二十四輯)
- 7 其處に全然ない、(第三百五十八輯)
- 8 外に在ったり、全然なかったりするものこれは極めて多いのであります、(第三百五十八輯)
- 9 全然見込はない、(第三百七十一輯)
- 10 全然見込はない、(第三百七十一輯)
- 11 全然取るに足らぬ妄説であると断言してよいと信じます、(第三百八十四輯)
- 12 固より全然首謀者が無いのであるから、(第三百九十一輯)

中間型の例は全用例の 23.8%を占める。「全然」は形式的に肯定形であるが、内容的に否定的要素を持つ「違う」「別だ」「異なる」などの語と結びやすい、また「不同意」「不可能」など「不」がついたものとも結びやすいと見られる。その用例は次に示した通りである。

- 1 私などは全然不同意だったんですからナー、(第百六輯)(名詞と共起する)

- 2 元治元年の臨時御用といふものとは全然別であります、(第二百二十三輯)
(名詞と共起する)
- 3 石高の上から旗本御家人の区別を立る事は全然不能である、(第二百六十一輯)(名詞と共起する)
- 4 田中さんの言はれたことは全然牧野違ひであつた、(第二百八十九輯)(名詞と共起する)
- 5 京都所司代の牧野とは全然違って居るといふことが分りました、(第二百八十九輯)(動詞と共起する)
- 6 私の取調べた事蹟とは全然違って居ります、(第二百九十輯)(動詞と共起する)
- 7 榎本氏の割腹を止めた大塚霍之丞氏とは全然別人さといふことが明瞭になったのであります、(第二百九十輯)(名詞と共起する)
- 8 全然事實が違って居ります、(第二百九十輯)(動詞と共起する)
- 9 全然異って居りますから、(第二百九十輯)(動詞と共起する)
- 10 事實は全然違って居るのであります、(第三百七十五輯)(動詞と共起する)

「全然」はほとんど名詞，動詞と共起する。動詞の場合は、「異なる」「違う」などの状態動詞とも共起するし、「賛成する」「捨てる」などの動作動詞とも共起する。「全然」は「全部・まったく・完全に・すっかり」などの意味を表す。

六 演説資料における「全然」

『近代演説討論集』資料における「全然」の様相を調査したが肯定を伴う用例は1例しか出てこない。その例は明治23年の演説の例である。次の通りである。

例 我々は全然法典編纂に反対するものと認めて喋々するものがありますが、(第十六巻，演説者：元田肇)

「全然」は動作動詞「反対する」と共起する。「まったく」の意を表す。否定を伴う用例も中間型の用例も見つからない。

七 結び

速記資料を通して近代日本語における「全然」の実態を掴んだ。日常会話を表す落語資料には「ぜんぜん」は一例も見つからなかったことは意外だった。「全然」という字面の例が出てきたが、その読み方は「ぜんぜん」ではなく「まるで」「まるっきり」「すっかり」「まるきり」などである。史談会資料には明治32年から「全然」（ぜんぜん）の用例が出てきたが、現在の「全然おいしい」のように「非常に」「とても」の意を表すわけではない。「まったく」「すべて」「完全に」「すっかり」「まるごと」などの意を表す。中間型の「全然」は用例がよく見られる。演説資料には明治23年に「全然」が見つかった。たった1例であったが明治20年代に「全然」が使われたことがいえるだろう。

3種類の資料における「全然」を調査したが、その結果は松井栄一と王信との調査結果と重なる部分がある。しかし、速記資料における「全然」の様相が全くといっていいほど紹介されていない現今、この調査には少なからぬ意義があるように思われるだろう。

注

- (1) 松井栄一「近代口語文における程度副詞の消長」（『松村明教授還暦記念国語学と国語史』・1977・明治書院）
- (2) 王信「“ぜんぜん”及其程度副詞用法考」（『日本学習と研究』2000・1）
- (3) 演説・談話などの音声による言語表現を聴きながら、これを何らかの方法で書き取り、後にそれを普通の文字表記に書き直す活動。明治初期には「疾書術」「傍聴記録法」「傍聴筆記法」「早書き取り」「言語速写法」などいろいろ用いられたが、矢野龍溪が『経国美談』後編（明治十七年（一八六四）の巻末に「速記法ノヲ記ス」として紹介以来、「速記」という名称が一般化した。日本の速記法は、明治十五年、田鎖綱紀によって完成し、彼のもとから育った若林垣蔵・林茂淳・酒井昇造らによって実用化した。（『国語学研究辞典』1977 明治書院）
- (4) その近代の範囲認定は若干の異説がある。たとえば勝本清一郎は戦後かなり早い時期に、室町末期の鉄砲伝来（天文一ニ）、あるいはフランススコ＝ザビエルの来日（天文一八）あたりに近代を置くべきだとの説をたてた（『近代日本文学の『把握』』『新日本文学』昭24・1）。室町時代に市民階級の原初形態の成立がみられ、西洋人との本格的な接触がはじめて生じたことなどが、その論拠である。相前後して、和辻哲郎も貨幣経済の発達に伴う都市の成立、茶の湯・華道など現代にまで連続する文化の発生などを主要なメルクマールとして、さらに百数十年遡る南北朝直後、十四世紀半ば以降を近代とみる説を発表している（『鎖国』昭24）。また、勝本は近世と近代との時代区分を西欧語への翻訳が不可能であるとの理由でしりぞけ、和辻は西欧のルネッサンス期にあたる十四世紀中葉を近代の起点とすることで、東西の歴史をほぼ共通した時代区分で統一できることを重視する。（『増訂版日本文学全史5 近代』（昭和53 学燈社）による）

- (5) 滑稽を中心とした内容を、会話を主として身振りを交えた描写によって語る伝統的な話芸。「らくご」という名称は、明治期に一般化したもので、近世前期には「はなし」「しかたばなし」「軽口(ばなし)」などが行われ、江戸では「おとしばなし」などが有力であった。明治十七年に、若林坩蔵の筆記により、速記術の宣伝を兼ねて出版された『怪談牡丹灯籠』は爆発的な反響をよんだ。そして、新聞に人情噺の速記が連載されるとともに、「百花園」をはじめとする演芸速記専門雑誌が生まれた。(『国語学研究辞典』1977による)

『口演速記 明治大正落語集成』は明治大正期において質量ともに最も充実した落語速記録掲載雑誌である『百花園』と『文芸倶楽部』を中心とし、その他の雑誌・単行本を補って編纂した。

- ・「百花園」

(東京・金蘭社刊)は明治二十二年五月創刊。明治三十年九月までは毎月二回、以後三十三年十一月まで月一回の刊行で総計二百四十冊が現在確認されている。落語講談速記雑誌の嚆矢であり、一流演者を揃えて大いに盛行した。内容は講談と人情噺の長期連載と、一回ないし数回で一話完結の落語を掲載している。本集成はこの落語を、甚だしく纏まりを欠く数話を除いて全編収録する。

- ・「文芸倶楽部」

(東京・博文館刊)は明治二十八年創刊。三十年九月から殆ど毎号落語速記を掲載した。明治三十二年以降は、ほぼ毎年、二回の落語増刊号を発行して大正末に至っている。その中から「百花園」収録のものとは演出法が大きく異なる落語を選んで収録する。

以上の解釈は『口演速記 明治大正落語集成』編纂摘記による。